OTONA NO SASSHI

Otona no Café

Vol.7 show without supporting acts

SanTsubu no Omame

Theater 711 URL : honda-geki.com/711

Email : otonanocafe@gmail.com

Twitter : @otonanocafe Otona no Café

URL : otonanocafe.com

Vol.7 show without supporting acts

MENU

それはお前だろ

世界観
顔パス
善し悪し
見送り
人生影絵
その店の店長
アテ式辞
運動会
ギリギリ思い出せない
少年とおじさん

娘っ子ら。

永久謝罪会見

鈴

Introduction

大人な対談!?
大人のカフェ × 尾形竜太

『大人のカフェ』による単独公演も今回でなんと7回目。今回のタイトルは『SanTsubu no Omame』とあるが、彼らの公演を観たことのある方ならすでにお気付きだろう。(チラシにもあるが)タイトルが示す通り今回の公演ではゲストヒロインは登場せず、単独公演として初めて3人のみで舞台に挑む事となる。ヒロインもいなければ、幕間ドラマも存在しない。言わば焙煎前の豆状態とも言えるシンプルなスタイルに、なぜ今立ち戻ったのか…。そのいきさつを解明するため、(と言えば聞こえは良いが半ば強制的にお願いされ)今まで幕間ドラマを担当してきた映像作家の尾形竜太氏(同じく被害者)と、『大人のカフェ』3名による対談をここに実現。ライブ前の暇つぶしに、そして初見の方は今までの『大人のカフェ』がどのようなスタイルで公演を行ってきたのか、ちょっとした予習・復習としてさらりと流し読みしていただければと思う。加賀さんがおもしろいです。

Text・Photo:西野正将

Profile

Otona no Café

芸人養成所の同期だった飯野智司、加賀成一、伊達さん（伊達円祐）の3人で結成したコントユニット。『お洒落8割、野暮2割』をコンセプトに、いまいち冴えない奴らが格好良くあろうとする衝動と滑稽さ、それぞれの持ち味を活かしたネタの数々に定評がある。

Ryuta Ogata

様々な映像作品の演出・脚本を手がけており、この秋、Netflixが運営するインターネット動画配信サービスにおいて、フジテレビ制作による連続ドラマ「アンダーウェア」の企画・監督を務める。これまでの代表作に、ドラマ演出として「世界一即戦力な男」、「TOKUNOSHIMAエアポート」、「敷島珈琲 バリスタは見た!?」、「私立探偵☆真壁リュウ」など。タイトルバック演出では「ブザー・ビート～崖っぷちのヒーロー～」、「BOSS」シリーズ、「太陽と海の教室」、「ラストフレンズ」、「天体観測」などがある。

Otona no Café × Ryuta Ogata

CONVERSATION 1

パンクにキーボード

—今日はよろしくお願いします。初めてライブにいらっしゃる方もいるかと思いますので、まずは自己紹介を。

飯野：飯野と申します。一応『大人のカフェ』ではリーダーをやっております。34歳乙女座です。

伊達：はい。えっと、伊達と申します。芸名は伊達さん。「さん」までが芸名でやらせていただいています。『大人のカフェ』ではコントの脚本を担当させていただいております。25歳の山羊座です。童貞です。

尾形：その童貞を含む紹介、デフォルトみたいになってきたよね（笑）。

伊達：あ、童貞です…。あ…すみません。よろしくお願いいたします。

加賀：加賀と申します。もうすぐ35歳になる魚座です。『大人のカフェ』では、センターをやらせてもらっています。

尾形：センターだと？このぉ。

加賀：あと、3人の中では1番恋愛体質ってことでやらせてもらっています。

—やらせてもらってるんですか？

飯野：許可した覚えはないですけど自称しちゃった（笑）。

—では、ゲストの尾形さんお願いします。

尾形：ゲストの尾形です。今まではドラマのタイトルバックとかをやっていました。最近はドラマも撮るようになり、映画にも関わったりしつつ、まあフィクションを中心に映像の演出をしています。

ありがとうございます。では早速本題のほうに入っていきますけど、読んでいる方は、『大人のカフェ』と尾形さんの絡みのきっかけというものがさっぱりわからないと思うので、絡む事になったきっかけがあれば教えていただけますか。

飯野：元々僕が働いていた中目黒のバーにお客さんとして来ていたのが尾形監督だったと思うんですよね。

尾形：その言い方やめてくれない（笑）。なぜかはっきりしない言い方だし。

飯野：尾形さんは週1回来る程度だったんですが、それが2回になり、3回になり、多い時は週8回来たのが最高記録。

尾形：1週間は7日間しか無いんだけどね。

飯野：7日間しかないけど、1回退室してまた戻ってくるっていう、まさにヘビーユーザーっていうか。それで色々と尾形さんの仕事とか僕らのやってる事とか話しているうちに、『大人のカフェ』の事を話したら「おもしろそうだね」と。

—尾形さんのほうから興味を持たれたと。

尾形：いや、そういう記憶はない…（笑）。どっちかというと「大丈夫なのか？」っていう心配の方が大きかった。

—具体的に言うと？

尾形：飯野から、3人組でやるんですよみたいな話を聞いた時に「何やんの？」みたいな。そして「コントやります」みたいな。そもそも飯野とは“バーテンの飯野”として出会っていて、急に「同じ学校（養成所）に行ってる同期と三人でコントやるんです」みたいな話をされたから「それ大丈夫？」って印象が強かったかな。

飯野：親心？

尾形：そんなもんないよ！（笑）よくある、ライブやって「おもしろければみんな観に来てくれるんだ」みたいな雑草魂な感じでやっていこうとしているんじゃないかと思ったら怖くて見ていられなかった。

一同：笑

尾形：「あのね、おもしろくてもお客が来てくれないと意味が無いんだよ」って。そのためには宣伝したり仕掛けをつくったりとか、何か考えた方が良いって言ったらポカンとしてるから、「じゃあ、何かやるか？」という流れになり、そしたら「舞台で使用するタイトルバックを作ってください」みたいな流れになった。

—まずは幕間ドラマではなくて、タイトルバックを作って欲しいと飯野さんから？

尾形：いや、伊達から「タイトルバックは作ってほしい」って初対面のとき。

—何か上からですね（笑）。

尾形：そうなんだよ〜。

伊達：いやいや、そんな事無いですよ！

—今の話を整理すると、何も戦略が無いしお前ら大丈夫かと。

尾形：そう。そもそも「俺が何かやってやる」とかじゃなくて「誰かにそういう事頼んだら？」っていう世間話だった。でも伊達からしたら自分はおもしろいことを考える自信はあるから、そういう人がいるならタイトルバックだけは作ってもらおうか、みたいな感じ！？（笑）

伊達：いや、そんな言い方はして無いですけどね（笑）。

―いいんですよ、伊達さん。でも、最終的には第6回まで続く幕間ドラマシリーズへと発展したわけですが、なぜ最初はタイトルバックだけという話になっていたんでしょうか。

伊達：一番マイルドな言い方をすると、不安だったっていうのはあって…。というのは、僕は2分とかピンの短いネタしか作ったことがなくて、初めてトリオで長尺のネタをやるってことで、全てが初めてづくしの状況だったんです。しかも尾形さんと会った当時は、まだネタも全部出来ていなくてとにかくゲスト含めた4人でちゃんとしたネタを完成させたいという思いから、余裕が全然無かったんです。今となっては失礼な態度だったなぁと…。

尾形：伊達にしたら、得体の知れない仲間を増やしたくないって気持ちがあったのかもね（笑）。

―これからの『大人のカフェ』の構想が決まっているのに、それをわざわざ乱してくれるなよと。

伊達：いや、正直『大人のカフェ』をこうしていきたいとかそういう感じとか未来像みたいなものは当時全く無かったし、「定期的になんかやれたらいいよね」ぐらいの感じだったから、どうなるのか不安だったっていうのがまぁ、一番ですね。

―伊達さん…。いいんですよ。ちなみに加賀さんはどのような反応だったんですか？

加賀：これを逃しちゃいけないと思いましたね。映像と一緒にネタをやれるってタイミングにそうそう巡り会えないし、伊達さんの「コントを大事にしたい」って気持ちもわかるけど、伊達さんの本を読んだ時に凄くおもしろかったし、コントの中身が100％以上のものを出せるんだったら一緒にやってもネタが映像に負ける事はないと思ったんですよね。だから尾形さんと伊達さんをくっつけたいと僕は思いました。

―尾形さんの中でも一緒にやったほうが良いという確信があったんですか？

尾形：いや、俺はやったほうがおもしろくなるって提案したわけじゃないし、俺自身もおもしろそうだなって興味持ち出した段階で、伊達の嫌がる気持ちも痛いほどわかったの。若いしこれからパンクにやっていこうとしていたわけだし。

―これから3人でパンクバンドやろうとしてるのに、いきなりキーボードのメンバーを飯野さんに紹介されるわけですからね。

尾形：パンクだろ！スリーピースだろ！！みたいなね（笑）。俺も伊達に会った時は「伊達が書いてるネタをベースにショートストーリーのドラマを挟むってことだから、ベースは俺じゃないよ！まずはネタの台本を読ませてもらえないか？」っていうアプローチをしたと思うけど。

伊達：でも尾形さんに稽古場に来ていただいた時、僕たちがやっているネタをおもしろいって言ってくださって、僕は純粋に嬉しかったっていうか、そもそも飯野さんが最初にまだ完成していない段階のネタ台本を尾形さんに渡していたんですよ。

尾形：読んだ読んだ！それが…、もう（苦笑）。

伊達：実際に僕が最初に書いた話は自分でも全く意味がわからないやつだったので「お前のネタがつまらないから、俺が映像で助けてやるよ」って言われているように当時の僕には聞こえていたわけですね。ネタがおもしろくないって思っている人に映像を撮ってもらうのは嫌だなって気持ちが大きかったのでおもしろいと言ってもらえたのは本当に嬉しかった。

―おもしろいと言ってくれた時に初めて、「この人は純粋に興味を持ってくれているんだ」という認識に変わったと言うことですね。

伊達：すぐってわけではないんですけど、逆に尾形さんもその稽古を観ておもしろいと思っていなかったら違っていましたよね。

尾形：まあね。「伊達ちゃんちょっときついよ～」てなってたな。最初に見た台本は、加賀が心臓をドンって叩いたら「あ～」とかいって絶叫する内容で、観なきゃ全くわかんないやつだったし（笑）。

―じゃあ、やるまでのきっかけを話すともう2時間くらいかかりそうなので、次に進めさせていただいて。

尾形：もういいよ終わりで。

伊達：いったんお手洗い行ってもいいですか？

―自由か！

Otona no Café × Ryuta Ogata

CONVERSATION 2

カフェ＋ヒロイン＝寅さん

—なんだかんだ尾形さんが幕間ドラマを担当することになったわけですが、僕も拝見してみて印象的だったのが、コントのネタと関連性のあるドラマに仕上がっていましたよね。

尾形：そもそも『大人のカフェ』って名前を聞いた時に、言葉に意味を感じるから、そこにパッケージ感があった方が良いんじゃないかって提案したんだよね。あと、俺はドラマを“男はつらいよ”にしたかったの。誰かが新しい登場人物に惚れて、その子がいなくなる。そしてまた誰か新しいヒロインが現れて…、みたいな感じで。こいつら3人が寅さん。

飯野：そうですよね。実際、寅さんネタもあったけど（笑）。

尾形：だから、「3人をカフェ店員と設定して、その店にヒロインがやってくる」というのを定番としたドラマを作る、これをパッケージとして進めていきました。

伊達：ただ、1回目だけは『大人のカフェ』の初まりってことで、『大人のカフェ』の紹介みたいな方向でドラマのシナリオを作っていただきましたね。

尾形：うん。1回目は「この3人誰やねん」だもん（笑）。だから2回目くらいからだと思うよ、コントのネタとドラマのストーリーがリンクするのは。

—実際仕上がったものを観てパンクス伊達さんはどうでした？

伊達：挑まなければ見えなかった景色だなって思いました。まだ2年目で、自分たちが売れてもいないのに悦に入るわけではないんですけど、いろんな方々のご協力で新しいものが出来たから、これを僕ら3人で大事に育てていきたいって気持ちになりました。

加賀：今伊達さんが言ってた景色っていうのは、もしかしたら飯野さんもそうかもしれないんですけど、ある程度僕が見たいと思っていた景色だったんで「この景色を伊達さんに見せたかったんだ」って気持ちにはなりましたね。

—「景色」気に入ってません？あと、加賀さんはその景色がイメージ出来ていたと…。

加賀：うん、完璧なイメージが。だからそれを伊達さんにちゃんと見せたいと思っていたから尾形さんの映像が出来上がった時はすごい嬉しくて。

—実際に尾形さんは、それまで様々な仕事をされていたわけじゃないですか。全然ジャンル違いなコントの幕間ドラマのシナリオを書き、監督をするということに抵抗はなかったんでしょうか。

尾形：すごい嫌だったよね…。

飯野：なんてこと言うんですか！！！

尾形：うそうそ（笑）。正直言うとトレーニングしたかった。

—新しい「景色」がみたかったんですか？

尾形：景色じゃない！（笑）。

加賀：尾形さんも景色好きなんだなぁ。

尾形：好きではない！

一同：笑

尾形：自分の名前だして俺が作ったって言うわけだし、何百人って人が観るわけだから、俺がいまいちだなって思うものを観せるわけにはいかない。だから、『大人のカフェ』を普段仕事で出来ないチャレンジ枠みたいな場所として使おうっていうか、あの頃の俺はとにかく自分が監督するシナリオを書きたかったのは確かだね。

飯野：1回目は正直「実験」だったと思います。僕らも初めてだし、そこに加わる尾形さんも初めてだし。

—ちなみにゲストヒロイン制にしたのは何か理由があったんですか。

加賀：3人で『大人のカフェ』を結成した時に、ちょっと僕が言うのもあれなんですけど…、3人だと花がないしプロ指向すぎると。

尾形：プロ指向……。ちょいちょい気になる言い方するよね、この人ね、ど素人だったクセに。

—発言ママでつかわせていただきます。

加賀：いや、ごめんなさい。言葉を選ぶと、感覚的に絶対女性がいたほうがいいと思ったんですよ。

尾形：今度は感覚的か……。ふわっとそれっぽい事言うよねこの人。

—まあまあ（笑）僕はゲストヒロイン制をおもしろいと思っていて、3人でコントユニットを組んで「さぁ、ライブをやろう」となったとき先ずは3人だけのネタから取りかかると思うんですよ。なのに、最初からゲストを入れてやるって思考はとても興味深いです。結果的にその構成は尾形さんの幕間ドラマに関してもうまく機能していますよね。

加賀：初めから3人でやる事に負けを意識したわけじゃなくて、女性を入れようと思ったのは、もう感覚としか言いようがないです。あと尾形さんの映像に関しては僕らからしてみたらギフトで、本当に天から来たものなんです。尾形さんはギフトでした完璧に。

—なんで2回言ったんですか？

加賀：いや、使ってほしいから。

尾形：ホント！気持ちワル……。

一同：笑

Otona no Café × Ryuta Ogata

CONVERSATION 3

走るか転ぶか確かめたい

—そういえば幕間ドラマは第6回公演までの約束だったとお聞きしましたが本当なのでしょうか。

尾形：それは、最初の話に戻るけど、パッケージをしっかり作って、ある程度出来上がったら何やっても許されるようになって、「大人のカフェはおもしろい」と浸透すれば、3人だけでやっても大丈夫なんじゃないかと思ったのね。

飯野：やっぱりここでパッケージを作り上げてくれた尾形さんが離れるって言うのは、チャリンコで言うと補助輪はずされるというか、そういう恐怖はありますけど。

—しかし幕間ドラマはともかく、今回はゲストもなしの3人勝負ですよね。

（※幕間映像はあるが、尾形氏によるものではない。）

飯野：やはり尾形さんの言うパッケージの定着もそうなんですが、僕ら3人だけで何もない状況でやってみたいというか、そうなるべきだなって気持ちは元々あったんだと思います。それがいつなのかは未定だったけど、まさに今来たって感じですかねぇ。

—尾形さんは「このまま続けて行こう」みたいな気持ちは全くなかったのですか？

尾形：ない！いつかは3人でやるべきだと思ってたし、切り口を変えて言うともっとプロになって欲しいのね。自分たちでやりたいことを選んでいけるステージに行かないといけないと思う。もっと3人が、ゲストにしても映像を作る人にしても、「こういう人と組んでみたい」と選べる側になり、自分たちがパッケージを作る側にならないといけないと思うし、だからこそ補助輪外すと転ぶのか、外しても走れるのか、走れても10メートルなのか、ずっと走り続けられるのか……。そういう事を体感と共に知るってことがプロとしての第一歩だと思うんだよね。

飯野：うん。実力がついて名前が売れることで、尾形さんから「また一緒にやろうか」って言われるような存在にならないといけないって感じはしてます。

尾形：あのね、別にそんな上にいるわけじゃないからね（笑）。俺も発展途上中なわけだから。まあ君たちよりはプロだけどね！（笑）

—今の話を聞くと、今後このタッグでやる可能性はゼロでもないし、ある意味今回は今後の運命を決める記念すべき第1回となるわけですね。

加賀：『大人のカフェ』を楽しみにしてくれてるお客様は、きっと第8回目からまたドラマが始まるのを楽しみにしてると思いますよ。

尾形：ない！それだけは言っとく。外せよ補助輪！

一同：笑

—ではお時間も迫ってきましたので最後にコメントをいただいて…。

尾形：皆さんに向けて…、今回の3人だけの公演は楽しかったですか？あと幕間の暗転は長くなかったですか？エンディングのトークはグダグダしてなかったですか？セッティングをもっと早くしてください。あと……、

—はいはい、それも含めて今回のライブは楽しみですね！収集つかなくなってきたのでこれで終わりましょうか（笑）。

加賀：あと、これだけは絶対入れてほしいんですけど。

—もう終わっていいですか？

加賀：次の公演は11月を予定しているので。尾形さんのスケジュールをちゃんと空けておいて欲しい。

尾形：だから暇でもやらないよ。

加賀：でも今回の公演を観て気が変わるかもしれませんよ。

尾形：俺はその頃、秋から配信開始のフジテレビとNetflix初の共同制作連続ドラマ「アンダーウェア」撮ってるから。銀座にあるオーダーメイドランジェリー店を舞台に、働く女性達のモノ作りを描いた群像劇ドラマ撮ってるから。監督として君たちが信じられない規模のもの撮ってるから、絶対に観に行けない。

加賀：ステマか！

一同：笑

OTONA NO MOVIE LIST

第1回『コーヒー畑でつかまえて』

ゲストヒロイン：山本絵里衣

山本絵里衣がアルバイトとして働くのは、飯野・加賀・伊達が経営する「大人のカフェ」というコーヒーが自慢のカフェ。そこに、ふらりと女性がやってくる。女性はコーヒーを頼むが、いっこうにコーヒーが出てくる気配はない。大人のカフェの3人と山本のどうでもいい話に振り回されっぱなしの女性は、次第に伊達に恋心を抱いていくのだが…。ドラマのヒロインは別に存在するという点でこの回はそれ以降のドラマとは異なる視点が特徴的である。「カフェ＋ヒロイン＝寅さん」という基本的な構成はこの回で確立され、今後のドラマにも受け継がれていく事となるのであった。

第2回『モカコーヒーは秋の空』

ゲストヒロイン：横田恵美

山本絵里衣が店を辞めて、3人は新しいアルバイトを募集することになる。そこに応募してきた横田恵美。山本がいなくなった事に落ち込む加賀と伊達に「仕事に私情は挟むな」と豪語していた飯野だが、横田を見た瞬間に驚きの早さで恋に落ちてしまうのだった。横田のお陰で店は安泰だと思われた矢先、銃を持った謎の男が現れる。突然の事に驚く3人。なんと横田は謎の組織に属する通称「タランチュラ」が変装した仮の姿だったのだ…（姿は伊達）。終始物語の途中に飯野のエロい妄想シーンが盛り込まれ、幕間ドラマの中でも一際“大人の”色気が目立つドラマと仕上がっていた。

第３回『おしゃべりホットココア』

ゲストヒロイン：東塚菜実子

伊達がツイッターでつぶやいた「大人のカフェでココアを飲むと恋が実る」というガセ情報により、お店は大繁盛。その噂にまんまと騙されお店を訪れた東塚菜実子と、どう見ても飯野にしか見えない（あまりイケてない）彼氏のミュージシャン。いまから結婚の承諾を得に行くという事もあり終始のろけた2人にうんざりする加賀だが、自分が東塚の父親にそっくりだということがわかり、なぜか母親にそっくりな伊達と協力して2人のリハーサルを手伝う事に。2人のおかげで本当の気持ちを分かち合えた東塚と飯野は幸せそうに店を後にする…。上手くいったかは謎のままだが、飯野の存在感が若干薄い回でもある。

第４回『素晴らしきかな、エスプレッソ！』

ゲストヒロイン：高田秋

前回に続きお店は大繁盛。なぜなら高田秋という可愛いアルバイトが入ってくれたおかげで毎日お店には高田目当てのお客がひっきりなしに訪れているからだ。しかし3人は高田の秘密に気づいてしまう。実は高田は世間ではすでに人気のクリスティーナ・アキというモデルであり、主演が決まっている映画の役作りのために極秘でカフェアルバイトをしていたのであった。申し訳ない気持ちに耐えられなくなり姿を消してしまった高田だが、しばらくして現れた高田を3人は暖かく迎え入れ、その修行のおかげか映画は大ヒットする事となったのであった。

第5回『カフェ店員は二度ベルを鳴らす（一度目）』

ゲストヒロイン：遠藤三貴

アルバイトがいないため働きっぱなしで体力の限界を向かえていた加賀。時を同じくして伊達の先輩がふらりと絵を預けに来たのだが、この絵が様々な事件を巻き起こしていく…。加賀の懇願により、男性限定でバイトを募集する事になったが、ろくな人間が募集してこない。しかし、圧倒的な魅力を放ち採用を射止めたのは、実は女性の遠藤三貴であった。男の子と思いつつも3人は遠藤の魅力にとりつかれ毎日頭の中でろくな事を考えない日々を送る。そんなある日、伊達は遠藤が絵を盗もうとしている所を目撃してしまうのだが、それは遠藤に変装した別の遠藤であり、カフェで働いていた遠藤はその絵を守るべく送り込まれた特殊捜査官遠藤であった…（言っておくがただ「遠藤」と書きたいわけではない）。そして事件は解決し、また3人だけになってしまった大人のカフェなのであった。ちなみに、作品に登場した名画『月と牛』は今後のコントにもちょくちょく登場する事となる。

第6回『カフェ店員は二度ベルを鳴らす（二度目）』

ゲストヒロイン：大久保聡美

退屈な日々に刺激を求める加賀。理想的な恋に妄想を膨らませていた時に現れた理想の女性・大久保聡美はなんと飯野の妹であった。即座に燃えあがった気持ちとは裏腹に「大きな顔が苦手」という大久保のトラウマから加賀の気持ちは空回りするばかり。しかし大学受験に受験票を忘れてしまった大久保の為、大学まで走って届けようとした加賀の熱い姿に大久保の気持ちは揺らいでいく…ように思えたが加賀は全然走っていなかったという事がバレてしまい、最後まで加賀の恋が実る事はなかった。結局受験に失敗してしまった大久保だったが、大人のカフェで1年働く事となり、翌年大学に無事合格。ちょっとおすましな兄を演じる飯野と、伊達のモノマネがとても印象的な回となった。

Thank you for coming.

本日は大人のカフェ第七回特別公演

『三粒のお豆』に

お越しくださいまして、

誠にありがとうございます。

公演時間は、約90分間、

どうぞ最後までごゆっくり、

お楽しみ下さいませ。

Otona no Café

公演時間90分／シアター711

©大人のカフェ

http://otonanocafe.com/
Email : otonanocafe@gmail.com
Twitter : @otonanocafe
Facebook:『大人のカフェ』
URL : otonanocafe.com

OTONA NO SASSHI
編 集 長:西野正将
文と写真:西野正将
デザイン:古里泰司
協　　力:千葉 美沙都

!?

otonanocafe.com